

火狩りの王

〔外伝〕野ノ日々



旧世界 ——— 〈一〉 5

第一話 光る虫

13

第二話 入らずの庭

75

旧世界 ——— 〈二〉 128

第三話 花狩^かり人

135

第四話 欠ける月

187

旧世界 ——— 〈三〉 228

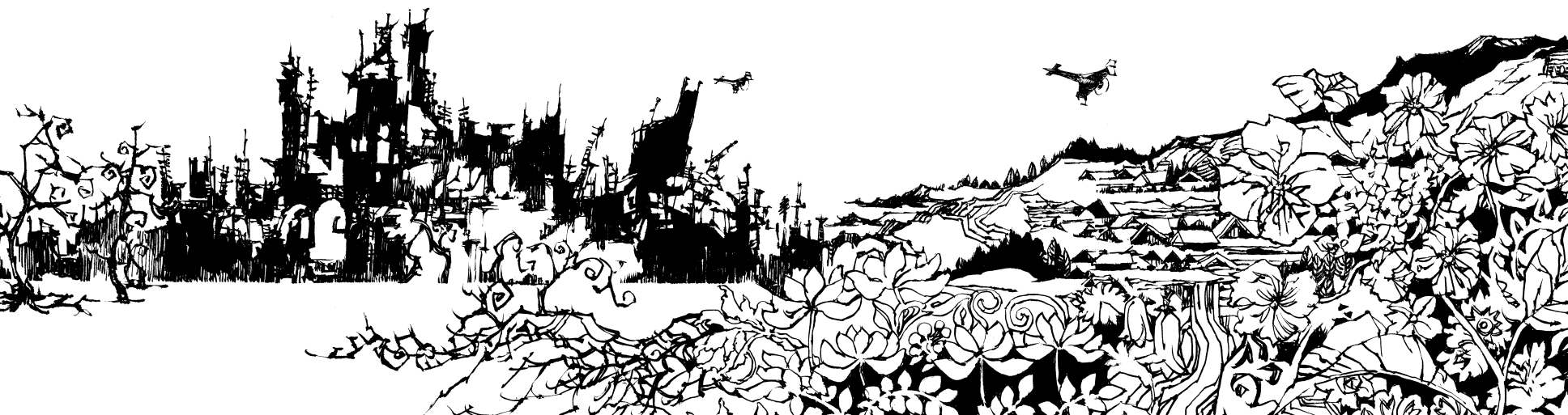
第五話 ほのほ

237

第六話 渦^{うず}の祭り

285

旧世界 ——— 〈四〉 324



旧世界——（一）

その年は、花が狂うように咲いた。

道のはたでも、田の畔でも、川岸や沼地の水辺でも。世界がとりかえしのつかない形にゆがみつがあるのを感じとって、花たちがいっせいに発狂したかのように、それは思われた。

牛たちが雨の中をひとかたまりになって歩き、蓮の花が咲き乱れる沼へ入ってゆく。〈子ども〉ととりわけ仲のいい、つのの中心にひとにぎりの白い毛が生えている牛は、白く光る花の中にまぎれてほとんど見えなくなってしまう。

水の中をゆっくり進む牛たちを横目に見やりながら、〈子ども〉は姉と二人、雑貨店へむかっていた。おなかの大きな母親にかわって、祖父の煙草を買ってくるのだった。二人の氣に入りの、色づけをされた飴を買ってもよいと小遣いをもらった。家畜の世話や家の仕事から、

二人して一時間近く自由になれる。よろこんで雨の中を出かけた。

村はずれの雑貨店の軒先からは、木々の生い茂る山の斜面を隔てて、下の町が見える。

森林と棚田にかこまれた小さな町だが、道が舗装され店舗が立ちならび、山の中腹にある村よりもずっとにぎやかだった。

町にある学校は、年が明けるとすぐ閉鎖された。町に家のある友達とは、もうずっと会っていない。何人かの子どもたちは、ある日すがたを消したまま行方知れずになっているというわさされている。遠くで起きている戦争が、ここにも忍びよりつつあるのだと大人たちが言うが、どこまでがほんとうのことなのかたしかめられない。すくなくともここに兵士のすがたなど現れたことはないし、どこかが襲撃をうけたという話も聞かない。

それでも、雑貨店の店先からも、気がつけばずいぶん品物がすくなくなっている。荷がとどかなくなったのだと、眼鏡の店主がぼやいた。

「じいさんの煙草も、いずれ入ってこなくなっちゃうかもしれない」

〈子ども〉も姉も、大人たちの顔や肩に重く暗い空気がとりついてはなれないのを感じとっていた。だからといってそれをどうすればいいのか、〈子ども〉にはまるで見当もつかない。自分たちや牛たちが、その不吉な空気を吸いすぎないよう気をつけるだけだ。袋に入った色

つきの飴を姉と一つずつ口に入れて、いやな気分を体から追い出そうとした。

「……あの音、聞こえる？」

姉が雨の中へそろりと踏み出した。なんだろう。〈子ども〉は飴の袋をにぎりしめてそのとなりへならび、雨を降らせつづける銀色の空を見やった。

つぎの瞬間、〈子ども〉が手をすべらせたために、袋が落ちてさまざまに色づけされた飴が濡れた土の上へ散乱した。

なだらかな山の線にかぶさる空のむこうから、なにかが飛んてくる。姉がまっ先に聞きつけ、いま〈子ども〉の鼓膜をもはつきりとかき乱している音をまき散らしているのは、飛んでくるその機体だった。

黒い三つの機体は現実とは思えない速度で空をつつ切り、ひざがかしぐほどの轟音を地上へぶちまけて飛び去っていった。怖い目に遭った獣が、急いで巣へ帰るところみたいだ……飴を落としたおかげであいた手で両耳を押さえながら、〈子ども〉はそう思った。

轟音の消えたあと、空気の中にいやなにおいが残っていた。鼻腔でまぶしくはぜるような、そのくせねとねと体中にまわりつく、嗅いだだめしのないにおいだ。さっきの機体たちが、なにかをこぼしていったのかもしれない。口の中に残った飴を舌の上で転がしたが、に

おいはいまったく薄れなかった。

「……帰ろう」

姉が言う。二人で手をつなぎ、走って家へもどった。二人は帰り道でそろって転び、姉が持っていた祖父の煙草が箱ごとつぶれた。

その晩。山の下の下町が消えた。正確には、火事が起き、人が残らず死んだのだ。

人の形をした火が、町中をうろつきまわった。うめいてたすけを求めるそれらは、怪物でも襲撃者でもなく、町の住人たちだった。燃えている人間を救おうとそばに近づいた者は、火にふれる前に自らの体内から燃えあがって死んだ。

なにが起こったのか、知る者はいなかった。人間が紙のようにつきからつきへ燃えてゆき、そして――

《子ども》の姉も祖父も母も、同じことになった。夕飯を用意するために火をつける。熱と光。火のそばにいる人間が、体の内側から炎上する。

《子ども》は一人、燃えずにすんだ。牛たちのようすが心配で外へ出ていたとき、家から火の手があがるのを見たのだ。内側に大きな火をかかえこむ家へ駆けもどろうとしたそのとき、

茂みから伸びてきた手につかまれ、《子ども》はそのまま森の中へ引きずりこまれた。

混乱のあまり、抵抗することもできなかった。

燃えあがる村から充分な距離をとり、それでも木立のあいだから悲鳴と火明かりがうかがえる位置で足を止め、手首をつかんだまま《子ども》の顔をのぞきこんだのは、大きな目をした少年だった。

あっと声をあげたつもりだったが、のどがぴたりとふさいで息すらもとにできていなかった。目の前にいるのは、学校で見知った少年だった。姉と同じ教室で学んでいたが、学校が閉鎖されてから会うことはなくなっていた。行方知れずになったのだといううわさも耳にしていた。なぜ、こんなところにいるのだろう。なぜ自分を、火になってしまった家族から引きはなしたりしたのだろう。

《子ども》が、勝手に涙のあふれる目を見開いたまましていると、二人、三人と、森の中に人影がふえていった。少年のうしろから、知らない大人たちが現れたのだ。

「行こう」

少年が言った。どこへ、と問いかえせずにいる《子ども》をまっすぐ見すえたまま、つぶけて言う。

「おれたちも、お前も、体の中に火の種をしこまれた。そばで火をつけると、みんなのようになる。火の種の病だ」

そんな病は、聞いたこともなかった。

「これは、だれかが作った病だ。この病にかかった者を、手間をかけずに殺すために。おれたちは、だれかから『死ねばいい』と思われたんだ」

〈子ども〉の体をふるえが駆けあがる。

「——いまから、この病を伝えに行く。おれたちを皆殺しにしようとした者たちのところへ。そして、同じ病にかからせる」

なにを言われているのか、一つも理解などできていなかった。それでも……背後の、しだいに大きく燃えさかる村から一刻も早くはなれなければ、さもなくば自分も発火して死ぬのだという鮮烈な恐怖が、〈子ども〉をうなずかせ、足を一歩前へ進ませた。

少年と大人たちに連れられて歩きながら、いくつもの疑問が頭蓋ずがいの中を乱れ飛んだ。

なぜ、そんな病が作られたのか。なぜ、それが自分たちの身に降りかかったのか。なぜ、家族が夕飯といっしょに燃えてしまったのか。だが、なんのために、自分たちを殺そうと考えたのか。

大きな戦争は、ずっと遠くで起きているはずなのに。

牛たちがおびえて鳴いている。

花が、花ばかりが夜でも狂ったように咲いていて、雨で地面に落ちた花びらを、〈子ども〉ははだしの足の裏で、おそろおそろ、踏みにじっていった。

第一話 光る虫



夜明けに鳥が激しく鳴いたその日、村は騒然としていた。

祠に祀る童さまのすがたが、消えたのだ。いつも夜明け前に床を出て童さまへ花を供えるおくどばあさまが来てみると、小さな木の祠の中が空っぽになっていたという。悲鳴を聞きつけた者たちが続々と集まり、畑仕事も機織りも手つかずのまま、ほとんど村中が総出で祠をのぞきこみ、一様に青ざめた。

祠の中にはいつでも、てのひらに乗るほど小さな稚児すがたの守り神さまがいるのだった。髪も着物も鼻も手も、雪のように白い童さまは、この国を支える姫神の分身だ。人の住む村にはかならずいて、黒い森と村とを隔てる結界を守っている。

その童さまが、せまい村に暮らす自分たちを外界から守る存在が、忽然と消えたのだ。夜が明けてまもない村の中はざわめき、不穏な空気がずしりと地面近くにわだかまった。

「こんなこと、いままで起きたためしがないが……」

「森から、炎魔の押しよせてくるかもしれないぞ」

年寄りたちはまがった背をかがめて空っぽの祠にむかって祈り、その場で泣きだす者までいた。

おそろしい、おそろしいと、うずくまって頭をかかえるおくどばあさまを、女たちがどうにかなだめようとするが、瘦せた老婆はますますふるえるばかりだった。

「だれぞ、童さまを盗んだのじゃあるまいな」

「そんなおそろしいこと、一体だれが」

ひそひそとささやき交わす声を、泣いていたおくどばあさまが耳ざとく聞きつけて、まるでいた背中をがばりと起こした。血走った目を見開き、老婆はわめく。

「よそ者じゃあ！ 不吉な村から嫁に来て、憐れに思うて、こっちはようよう気にかけてやりおつたのに……あの、あの、よそ者の、恩知らずが！ ほかにおるかいな、あの子のほかに、こんなこと……」

墓石の上にのぼって大人たちの頭越しに祠をのぞきこんでいた七朱の足もとが、そのときぐらりと揺れた。

「うわっ」

五つの石を組んで作った墓が崩れ、七朱は土の上へ背中から転がった。思わずあげたさげび声に、全員の注目が集まる。

「こりゃ、ばかたれが！ 墓を踏む者があるか、この悪ガキめ！」

「まさか、お前のいたずらじゃあるまいな」

鬼おにのようにどす黒い顔をした大人たちににらまれ、七朱はあわてて立ちあがりながら、てのひらを顔の前にかざした。

「ち、ちがうちがう！ おれやない。おれやないし、だれにも童わらしさまを盗ぬすんだりなんぞ、できるもんか」

だれかが吐はき捨てるように、ため息をついた。

「あほたれが。子どもがえらそうな口をききくさって」

「相手にするな、死にぞこないの子なんぞ」

自分に背をむけかける大人たちに舌をつき出し、七朱は駆けだしながら大声でさげんだ。

「うっせえ！ 人の悪口ばかり言うところから、罰ばちがあたって、姫神ひめかみさまが童わらしさまをとりあげなさったんかしらんぞ！」

七朱の高らかなさげび声が、空っぱの祠ほくらの前に集まる者たちにそそぎはじめた陽の光に溶とけていった。

川に架かる橋をわたり、機織はたおり小屋のあいだをぬけて走る。小屋からは、規則正しい織り機の

音が、かたとんかたとんと響ひびきはじめていた。騒さわぎに駆かけつけず、いつもどおりに仕事をはじめた者の中には、この春に嫁いできたばかりの嫁御よめごもいるはずだった。

よその村からの花嫁を迎えたあと、村には変事がつづいた。何度か小規模な地震じゆ揺れが起こり、結界の塀へいの外では夜通し炎魔えんまたちが吠えつづけた。

そして、あのほうき星。

空を切り裂いて飛ぶ大きな星が見えたのは、つい先日のことだった。夜の空がさつとまぶしく光り、その異様な明るさに、戸締まりをして床についていた者たちもみな起き出して夜空を見あげた。銀の尾を引く大きな星が夜空を馳はせてゆくのを、村中の者が目撃した。……思えば、あの星は兆きざしだったのかもしれない。なにかが変化するという、その前ふれだったのかもしれない。

だが、結界に守られたちっぽけな村で暮らす者たちに、なにが起きているのかを知るすべはなかった。木々人や流れ者の火狩りに問うてもたしかな返答は得られず、そして今度は童わらしさまががたを消した。

うろたえることしかできないとき、村の者たちは人身御供をしつらえる。かつてもそうしたように、せまい村の中でやり場を失った不安を、今度もだれかに託たくそうとしている。

七朱は、畑の水まきと草とりをしながら、ここまで聞こえてくる機織はたおりの音をいつもより大き

く感じていた。日が暮れるまで、機織りの音は止まることがない。繭から糸をより、回収車に引きとらせる絹の織り物を、小屋にならぶ木製の機械の前に座った女たちが、毎日毎日作りつづける。それはきっと、山の上の村で繭を生み出す蚕という虫の営みに似ているにちがいないと、七朱は思う。

腰を伸ばし、視線をあげると、急峻な山肌にしがみつくようにして、白い塀に周囲をかこまれた村がぼつりとあるのが見える。山の上の繭の村と、その下のこの機織りの村は双子のような存在で、両方の産物によって生まれる布地を首都へ売ること、ともに生計を立てていた。（あっちは、どんなところだろうか）

七朱がそれを想像しない日はなかった。この村の中を流れる川の上流、水源に近い土地にある繭の村では、虫たちを養い、まろやかな繭を生む。人間が食べるための野菜を育てる畑よりも、蚕に食べさせる桑畑のほうがひろいとも聞く。かたとんかたという機織りの音のかわりに、虫たちがせつせと桑の葉を食む音が、絶えず響いているのかもしれない。

二つの村は近いので、中間地点の森に住む木々人たちのたすけを借りて、村人が行き来をすることもあった。どちらかの村に人の手がたりなくなったり、働き手や嫁をさし出すのだ。しかし、それとて滅多にあることではない。春の夜のほうき星よりも先に村へやってきた嫁御は、完

全な外の者、訪れることをだれもが予想せず、望みもしなかった存在なのだった。

畑のむこうで、七朱と同じ十歳の少女が、まだ幼い弟を抱いてあやしている。木陰に置いたかごに入れて寝かせておいたのに、目をさますなりむずかかって、止まらなくなったのだ。土の上で働く子どもは、十人あまり。七朱はそのだれからも、ある程度の距離をたちつづけていた。

『死にぞこない』に近づくことを、子どもたちは、大人たち以上にきらうからだ。

童さまが消えても、結果はどうやら機能しつづけているのか、炎魔が塀をつき破って襲ってくる気配はなかった。近くの森から、獣たちの声が聞こえてくることもない。起こったことは裏腹に、なにごともしなかったかのように時間がすぎてゆき、やがて村長を中心に幾人かの大人だけを祠の前に残して、人々は自分たちの仕事へもどった。好奇心旺盛な子どもたちは、いち早くとなり声とげんこつによって追いはらわれたというわけだった。

もし、自分が火狩りだったら。世界中を覆っているという黒い森に犬を連れて立ち入り、人を襲う炎魔と戦って、人々に火の恵みをもたらす存在であったなら。——のけ者あつかいされている嫁御をたすけてやれたかもしれない、こんなふうには忌まわしげにまわりの子どもたちから避けられることもなかったかもしれない。

考えても仕方のないことだ。七朱が『死にぞこない』でなくなるなどと、不可能なのだから。

七朱の腕の上を、てらてらと背中を光らせて虫が這い、追いはらいもしないのに、日の光のほうをめざして翅をひろげ、飛んでいった。

川を手紙が流れてきたのは、昼前のことだった。木箱に入った手紙は、山の上にある村から流されてきたものだ。

「繭の村でも、同じことが起きておるそうな」

山の上の村でも、今朝、忽然と童さまが消えてしまったのだという。童さまはいないが結界の力は消失していないらしく、森の炎魔が塀を破って入ってくることはない。……そのような内容の手紙だったそうだ。その内容は人の口から口へ伝わり、あつというまに村中へ知れわたった。なにが起きているかはわからないが、どうやら変事に見舞われているのはここだけではないらしい。

夕刻。七朱は一日の仕事を覚えて、持ち帰るためのわずかな菜っ葉の泥を洗い落とすと、川の水に足をひたして涼んだ。同じように畑仕事をおえて野菜を洗い、鍋を磨いて、夕餉の支度を始めるまでのつかのま、川遊びをする子どもたちが、高い笑い声をはじけさせている。もう春もおわろうというところだから、日光のもとで一日働いた体にはたっぷりと熱がこもっている。子ど

もたちは水を引っかけて笑って、七朱はその仲間には決してくわわらず、みなからはなれて岩の上に腰かけていた。

はだしの足からふるい落とされた枯れ草が、洗った野菜にからみついている。七朱はほかの者よりも下流の水しか使ってはならない。死にぞこないのふれた水を、だれもが忌みきらうからだ。赤ん坊のおしめを洗ったあとの水で、七朱は自分の取り分の菜っ葉を洗う。

日が長くなったために川水はまだきらきらと光っており、ほてった子どもたちの手足は生き生きとしていて、七朱がくわわることのできない光景は、のどかで美しかった。

「なあ、童さまを盗んだの、ほんとにお前とちがうんか？」

川の水に体のほてりを洗い流していたガキ大将の十輝が、いつのまにか七朱のうしろへ立っていた。着物のすそから、ぼとぼとと川水のしずくが垂れている。

乱暴者のこいつだけは、なぜか死にぞこないにやすやすと近づいてくる。そばまで来ては、けんかを吹っかけてくるのだ。わざわざ近づいてきて敵意をあらわにされるより、忌まわしげに視線をそらしてしてくれるほうがどれだけましか知れない。

「……ちがう。上の村でも同じなのやと、手紙に書いてあったのやろうが」

七朱が返事をする、十輝はあからさまに、不満げな顔をした。

「上にも、お前みたいな死にぞこないがおるかもしれんやろ」

七朱は反射的に、岩の上へ立ちあがった。が、十輝のほうが背が高く、子どもなりにも肩や腕の筋肉もがっちりとしており、小柄な七朱が立ったところで威嚇にすらならなかった。川辺の子どもたちが、いつのまにか二人のやりとりをじっと見守っている。

「うるせえ！ そんなこと、知るわけなからう。そんなに知りたきや、お前が山へのぼってこい」不穏な気配を感じとった幾人かは、野菜を入れたかごをかかえてこの場をはなれてゆく。十輝は一步前へ踏み出し、険しい顔を七朱に近づける。腕力の差が威圧感になって空気を伝ってくるようで、七朱の腹の底をぞわりと危機感がなでていった。

「死にぞこないが、えらそうな口きくなよ。お前でないなら、やっぱり、あのよそ者かよ」

その瞬間に、頭の中に怒りがはぜた。立ちむかえば青あざぐらいではすまないだろうが、ここで引きさがるのは自分に対して許せなかった。前にとくくみあいになったときには、前歯を折られた。しかし七朱は十輝の髪をごっそりぬきとってやり、十輝はいまだにその部分だけ頭皮をむき出しにしている。今日は鼻の骨くらい折ってやる。十輝を目の前に、どう立ちまわるかを頭の中にえがいていたそのとき、

「こりゃあ、けんかせんのよ。口ん中けがすると、お夕飯が食べられんよ」

たおやかな声がして、張りつめていた空気を一気にかき乱した。声の主が、ひょっと七朱のとなりへ現れた。とたんに、猛々しかった十輝の気配がかしぐ。

「あっち行けや、この……」

「うん？」

細長い首をかしげると、声の主の長い髪がすらすらと肩の上を揺れる。十輝は口をつぐみ、憤然として背をむけると、集落の方角へ走っていった。

「しょうがないねえ、生意気ざかりで。七ちゃん、いかんよう。仲よくせんと」

となりへやってきたのは、すらりと細い娘だった。厄払いの花嫁として村へやってきた娘は、前掛けをてのひらでなでつけて、岩の上へひざを折る。

「……七ちゃん」て言うなやって、ほたるちゃん」

川面へ横顔をむけたまま、ふふふ、とほたるは笑う。

「いいでしょう。弟のようなのもん」

はじめて見たとき、細い人だと思ったのだが、この機織りの村で朝から晩まで働きだして、ほたるはいっそう痩せた。今朝、童さまの不在にまっ先に気づいたあのおクドばあさま、機織り職の監督官の座をだれにもゆずろうとしない老婆が、酷なまでにほたるをこき使うのだ。